韓国の大学はいま

― 日本追いこせ大作戦を現地に見る ―

1995年3月

和光大学「大学入門期教育の実践的研究」グループ
（授業研）

第2部　95年3月調査 ― 学生と共に3.1のソウルを歩く――

韓国再訪の機会は、意外に早く来た。メンバーの一人が今年度担当のプロゼミで「平和を学ぶ」というのをやっていて、仕上げの年度末に学生を連れて韓国に行く計画があり、93年春の中国行のときのように、便乗できることになったのだ。

別の所で何度か書いたようにプロゼミは、1年生用の専門教育入門科目で、それまでの受け身の勉学態度から主体的な学習、研究姿勢への転換をめざして、初歩の研究体験を小集団の共同でさせることを眼目とする科目だ。だから専門のテキストを読んだり講義したりはしないで、学生主体の活動、例えば見学行や現場に働く人を招いたり訪問して話を聞くことなどが、勧められる。「平和を学ぶ」も、のちに担当教員自身が書く通り、「前期は平和学の基本的な概念をともに検討し…研究発表や討論…見学やゲストスピーカーの話を聞く…」（講義要目より）などしたのち、後期には日韓史に関する本を読み合わせたそうで、あとは現場を訪れての実体験、というのがごく自然な筋道である。

しかし2月末から3月初め頃というと、入試や期末採点ほかの雑務で大学は大忙しの季節だ。結局再訪の補充調査は、当の教員のほかは研究代表者が参加担当することになった。

実はわが「入門研（授業研）」グループの研究領域は、「はじめに」にも書いた通り大きく分けて二つあって、一つはこの訪問調査、もう一つの領域は授業研究である。これも「はじめに」にある通り、授業研究の主方法の一つである参観研究は、94年度はプロゼミにテーマを絞って実施した。研究報告書Ⅱを見ると分かるように、各学科のプロゼミ参観記録が、単発継続にわたってズラリ並んでいる。だからこの韓国再訪のプロゼミ随行は、学外授業の参観記録も兼ねている、といっていい。

以下に、第1部でと同様、一に研究代表者の全行程にわたる記録をのせ、二にプロゼミ担当教員の文章及び参加学生6名が現地で書いた「この旅で学んだこと」の文をのせる。研究報告Ⅱに見る通り授業研究の主方法の第2は、学生の授業との関わり方に関する実態調査で、末尾の節に同年の人間関係学科プロゼミ「ラスト・ラブ」に参加した学生26名の小文がのっている。本報告のこの部分は、Ⅱ授業研究のそれと呼応するものといえる。担当教員の文章は、継続参観法での「授業者からの手紙」の変型ともいえるだろう。つまりこの第二次調査は、二つの研究領域とその具体的な諸面を兼ねるものに自然になった、ということができる。

一、3.1のソウルと韓国で出会った人びと

1. はじめに

プロゼミの表題が「平和を学ぶ」で日韓史を読み合わせた後の韓国行なのだから、時期は当然3月1日をねらうことになる。3.1というのは第1部の5.独立記念館見学に関連して述べた通り、1919年3月1日にソウルで起こり、全国に波及した独立運動の大きな盛り上がりである。韓国では8月15日の光復節と並んで二大記念日となっており、各地での式典や集会を実見できる見込み。さらにプロゼミ学生の一人で高校生のとき四国の高校教員・生徒のサークル活動で映画制作に加わり、韓国を訪れた経験のある者がいて、彼女のツテで目下問題になっている元慰安婦の一人と会える可能性も強くなった。

第1部で度々登場したP嬢には、今回も世話になった。彼女の紹介で母校漢陽大学の史学科の教授と、たまたま来日中を機会に会うことができ、3.1を中心に有効にすごせる段取りをつけてもらえたし、現地でも行き届いた世話を受けた。漢陽大学の学生との交流も、彼女の采配で実現することができた。さらに、上記の学生のツテで知り合った報道写真家が、進んで韓国の若い社会人たちとの懇談を設定してくれた。これも事前には全く思いがけなかった大きな収穫である。

これら何人もの韓国人たちの善意と努力のおかげで、学生たちにもわれわれにとってもこの5日間の旅は、予想を超えた成果あるものになった。そこで第1部でのやり方に倣って、この調査行で得たものをここでまず箇条書きにしておこう。記録を全部書き終えた上で、改めて各条について詳しく述べることにする。

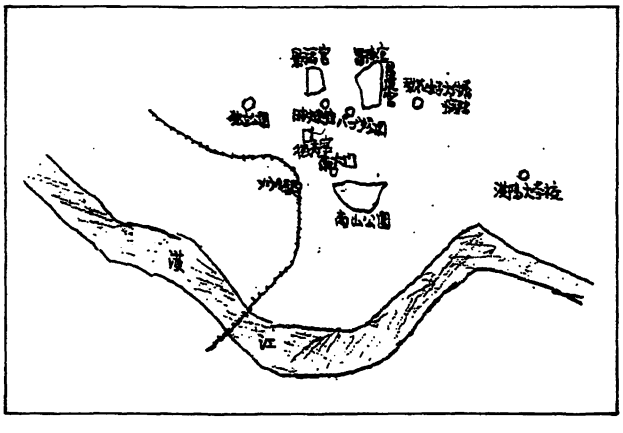
1) 3.1独立運動は韓国で今も、迫害に屈しなかった民族の誇るべき史実として、大切にされている。

2) 第二次大戦中の慰安婦問題に関わって、日本が国として加害を謝罪し補償することを求める、かなり強い要求がある。

3) 現文民政府への期待が大きかっただけに、変化のさほどないことへの失望もある。青年たちも成人も、徴兵制を仕方のないこととして肯定しており、その分南北統一への夢は強い。

4) そうした状況の中で、社会の今後を深く考え、ねばり強く挺身する人びとがいる。そして彼らに共通なのは、若者を信頼して未来を託そうとする希望である。

第1部でもしたように、今回われわれが訪れた主な場所を、ソウル中心部の簡単な地図で示そう。



2. 元慰安婦と語り、関係団体のデモを見る

金学順ハルモニと会う

ソウル着の翌朝つまり3.1当日の午前に、梨花女子大学付属病院に元慰安婦金学順さんを見舞う。韓国で初めて慰安婦だったことを名乗った本人で、若い時わずらった胸が、この問題をめぐる活動の過労で再発しての入院と聞いた。前述の通り学生の一人の知人である報道写真家の金氏が、会見を設定し案内し通訳もしてくれた。大部屋で同室者もいるので病室は遠慮して、病院の一階待合室の一隅を借りた。椅子を動かして円陣にし、金ハルモニ（韓国語でおばあさんの意味）を囲む形で一行8人が席を占めた。

16歳で捕えられる　薄青色のパジャマは同室者たちも着ていたから、病院備えつけの病衣なのだろう。色白で若い頃の美貌が偲ばれる、上品な老婦人だ。やや固い表情で、「あなた方がどの程度私たちのことを知っているか分からないので、どう話していいか分からない」とためらう様子なので、やはりいきなり初見の大勢で話を聴くのは無理なのかな、と心配になった。病衣にカーディガンを羽織った姿が寒そうなので、当方相棒の教員がコートを着せかけてあげたり、私が思いきって「似た年輩の女性として」、つらい思いをさせたことを「韓国の皆さんにも同じだけど特に」と謝罪の言葉を述べた。このあたりから次第に、彼女の重い口がほぐれてきた。

1991年12月、日本国としての謝罪と補償を求めて東京地裁に提訴したのが初まりで、以降名乗り出る人が続き韓日の民間支援団体も増えて、何度かデモや座りこみをした。昨94年は4度も来日したそうで、寒い中のデモや大声で叫び続けたことが老体に障ったらしく、入院2ヵ月という。金氏が事前にくれたハルモニの身上メモと本人の話を総合すると、1924年生まれの70歳、父は独立運動に関わって中国東北部（満州）に逃れ、客死。母と帰国し、小学校を終えてから妓生（キーセン）になるための学校に入り、歌や踊り器楽演奏のほか、書道や道徳まで3年間学んで卒業、芸能で身を立てる希望の門出をした。

1939年、数えで16歳のとき、学費を出してくれた人など3人で中国に行った折、日本軍に捕まって連れと引き離され、最前線を転々とすることになった。死ぬ思いで脱走の機会をねらっていたところ、偶然韓国人の商人と会い、同国人の情に訴えて連れて逃げてくれるように頼んだ。決死の脱走は成功し、慰安所の苦しみから3ヵ月余で解放された。以後はその商人と暮らし、一男一女を得て戦後一家で帰国したが、52年に夫が事故死。二人の子も次々不慮の死をとげて、一人きりになった。夫は酔うと前身を口にして彼女をさげすみ、救出を恩に着せたという。

歴史の証人として　「男が嫌いになり」再婚せずに暮らしたが、余命も残り少ないことを思うと、今歴史の証人となる必要を感じて、名乗り出る決心をした。金が欲しいのではない、とくり返し言われた。日本に再び軍事大国化の恐れがある今、二度と自分のような人が出ないためだ、と。女性団体の連合会にまず話して、法的なことなどで助言支援を得たとのこと。

話は韓国語だが、過去の屈辱と恐怖を語る時は、「天皇陛下の命令だ」「逃げたら殺す」な

ど当時の日本兵の言葉をそのまま真似て、激しい身ぶりと共に口にした。中国台湾等々の被害者と合わせると、慰安婦は大変な数と思われ、韓国に今生存するのは千人単位と推定される。彼女に続いて名乗り出たのは160人、うち約50人が常時活動しているという。支援団体も増えて韓日合わせて百近く、「韓国挺身隊対策協議会」など主な3団体の名は、このあと行った日本大使館へのデモのとき、横断幕にみかけた。

日本政府はこれらの声に、耳を傾けようとはしない。私たちの死ぬのを待っているのでは。訴え始めて3年の間にも、5人が亡くなった。同じ慰安所に捕まっていた人たちは皆死んだらしいし、自分が今こうして生きていることさえ不思議な気がする、と。

墓をあばいてやりたい　一通り話が終わって、真剣な表情で言葉を選びながら質問が始まった。昭和天皇の死をどう思いますか。独りの生活に苦闘していたため、すぐには知らなかった。今も彼の墓をあばきたい。金氏が訳しながら、これは韓国最大級の敵意を意味します、とつけ加えた。韓国でのこの問題への関心は。彼女は悲しげに首を振って、若者はあまり関心を持たないし、政府も関与しない、野党の政治家が個人的に発言する程度、「恥ずかしい」と思うようだ、と。えっなぜ、と驚いて反問したら金氏が、儒教道徳が今も生きているから、と答えた。彼女たちのせいでは全くないのに、周囲の目は決して温かくはないらしい。

慰安婦体験はあなたの人生にどんな意味を持つのですか。女子学生の一人が、残酷なまでに率直な質問をした。16歳ですからね、と言葉を強めて、未来も夢もあったのが、地獄へ落ちた、その後の人生は過去を隠してひけ目をもって生きねばならなかった、との答。

日本に来られての印象は、日の丸への感情は、韓国の徴兵制をどう思いますか。矢つぎ早の質問に、次々はっきりと答えられた。往復の飛行機も日本のには乗らない、日の丸を見ると今も胸が煮える、しかし徴兵は国を守るために仕方ないと思う、と。

会見も終わりに近く、それまで黙りがちだった女子学生が、懸命な表情で言った。国だけを見ないで下さい、こうして聴いて学ぼうとしている私たちもいるのです、と。金さんはじっとその子を見て、やさしい微笑でうなずいた。

大使館前のデモを見る

日本大使館は卵の痕だらけ　お大事に、長生きして、とくり返して病院を辞してから、金氏の先導で正午前に日本大使館前に着いた。ここで慰安婦問題をめぐる数団体合同のデモがあるのだ。ところが少し手前の道幅一杯に、黒い服の警官隊が幾重にも楯を並べて立って道をふさいでいる。元慰安婦たちをはじめ関係の人びとをのせた大型バスが隊列の前に停まって、双方にらみ合う形だ。やがてどう話がついたのか、警官隊は列を解いて大使館前に後退し、集会のある小広場から大使館を守る形で、横長に隊形を組み直した。

金氏に教えられて見ると、日本大使館は立ち並ぶビルの中では目立たない薄茶色の四角い建物で、外壁のあちこちに白く汚れた痕が見える。デモの人たちが抗議の意思表示に卵を投げた痕だそうで、92年1月8日以来この関係団体の合同デモは毎水曜にねばり強く、今日で155回になるという。なるほど今日は水曜で、3月1日とは偶然重なったわけだ。

バスから続々と関係者たちが降りて、待っていた群集の中央部に入り、集会が始まった。病院で聞いた団体名の横幕、日本への要求を大書

したノボリにプラカード。民間基金反対と書いたのもある。白髪の数人が揃いのハングル文字の鉢巻をしているのが、元慰安婦自身という目印のようだ。代表らしい女性が韓国語で演説とシュプレヒコールをし、すぐに日本語訳がくり返される。中高年女性の一団が大きな横断幕を広げているのを読むと、「〈女と人権〉くにたち市民の会」とある。はるばる異国に来た人たちは、慣れぬ様子で興奮に目を輝やかせ、懸命に幕につかまっている格好だった。

これらの人たちを幾重にも囲む群集をかきわけ割りこんで、カメラやマイクを伸ばす報道関係者たちの数が、また多い。折りたたみ踏み台を持参していて、人びとの頭ごしにカメラや長いマイクを出す姿も。金氏も大きなカバンに用意していたらしいカメラを出して、先刻までの柔和さとは別人のような真剣な敏捷さで、動き回りはじめた。

歌と踊り、英語の演説も　今日のデモ集会の主役の一つは、「日本軍“慰安婦”問題アジア連帯会議」という団体で、3回目とあるから年1度なのだろうか。韓国だけでなく台湾、フィリピン等々から集まったそうで、韓国語と日本文の決議文を配って、替る替る演説した。浅黒い肌にちぢれ毛の女性が英語で話しているのは、フィリピンかシンガポールあたりの人だろうか。民族服らしい姿も見られた。

集会が盛り上がった頃に、人びとの輪の一画が割れて、待機していたらしい男女10人ほどが、揃いの白と茶の韓国服で手に手に鉦や大小の太鼓を下げて現れた。韓国特有の軽い身のこなしで踊り歌いながら、小さな輪を回って力強く合奏する。リードは鉦を持った青年らしく、一回りごとにテンポが速くなる。見ている人の何人かも、つられたように歌と踊りの輪にとびこんで、自己流の踊りを始めた。

すべて合わせて1時間あまり経ったろうか。デモ行進に移るのか人びとの輪がくずれ始めると、うしろの方で待っていたらしい別の、こちらは男性がほとんどの一団が横断幕を広げ、大声の演説を始めた。見ると「太平洋戦争犠牲者遺族会」とある。解説によるとやや右寄り（日本でも遺族会は大抵そうだ）の団体で、慰安婦関係の団体とは一緒に集会をせず、時間をずらしてやることになっているとのこと。

3.　3.1記念集会と西大門監獄跡を見る

独立運動発祥の地

パゴダ公園にて　次は2時から3.1運動記念式典があるというパゴダ公園に回る。1919年3月1日、33人の志士たちが起草署名した独立宣言がここの八角堂で読み上げられ、集まった何万の大衆が独立万歳を叫んで市中をデモ行進した。これが全国に波及して、厳しく弾圧されながら約1年にわたって全国各地で続いた。大独立運動（日本では万歳事件と呼ばれることも）の発祥の地である。

この運動の様子を描いた大きなレリーフが数枚、公園の一画に並び、ハングルの説明書がついている。日本軍の威かくと発砲にめげず素手

で進んで倒れていく人びと、妓生たちのあでやかな姿もまじる。彼女たちの長い髪を軍馬の尾に縛りつけて引きずり殺した残虐な図も。日本兵の顔と姿は最大限憎々しく、韓国の民衆はそろってけなげで美しい犠牲者の表情に描かれている。

当時韓国の各地方に常設の商店はなく、決まった日に市が立つしくみだったから、パゴダ公園から全国各地にひそかに運ばれた独立宣言や隠れて作られた太極旗は、市の日に一せいに人びとに配られ、これがあちこちでの蜂起になったという。こうしたオルグの一人に梨花学堂の女学生だった柳寛順があり、彼女が故郷のデモを先導したのもその地の市日だった。たちまち捕えられて激しい拷問を受けたが、最後まで屈せず10代の若さで獄死し、「韓国のジャンヌ・ダルク」と呼ばれる。彼女の姿もレリーフの一つに、民衆の先頭に立つりりしく美しい少女像として描かれていた。

西郷さんに似た銅像　金氏は他用で大使館前で別れ、3.1の後半は同所で落ちあった漢陽大学史学科の朴教授が案内してくれた。公園に入ってすぐの所に、独立宣言に筆頭者として署名した孫秉熙の大きな銅像が立っている。朴教授は彼の伝記を書いたことがあるそうで、えらい人でした、日本でいえば西郷さんのような感じの人、と微笑しながら話された。東学農民革命とも関わった一人で、私も以前韓国人の同僚のゼミを参観したとき名を聞いた記憶がある。西郷さんといえば征韓論の主唱者だが、反明治政府で終わった人だし、たしかに貫祿とそれに伴う人間的なやさしさの感じで、二つの銅像は似ていた。

八角堂のそばの広場で開かれていた集会をしばらく傍聴したが、全部韓国語で分からないし、大使館前と違って報道陣の姿もちらほら。代わって目についたのは、陸海空軍の礼装をした軍人が各々数人ずつ、直立不動で集会を守るように並んでいた姿だった。そろって韓国人には珍しい長身だ。解説によると、今日午前に政府主催の記念式典が某所であったそうで、パゴダ公園でのこれはその流れの、どちらかというと政府に近い団体が中心という。

なるほど入口でもらったパンフを見ると、中身はハングルだが表紙の主催者欄は漢字で、遺族会や光復会の名がある。光復会は政府の外廓団体といったところらしく、運動で犠牲になった人の遺族に補償金を出したり（獄中にいた年数で金額を決めると読んだ記憶がある）、日本のマスコミや出版を見張っていて大臣の無反省な言辞等を告発する役目をしていると、これも本にあった。

志士たちを捕えていた監獄跡

独立門のある公園　もう一つソウル市西方の独立門の前でも集会があって、3時からのはずだから行きましょう、と促され、思いがけず3.1記念集会のハシゴとなった。地下鉄で数駅、地上に出ると明るく広々した公園が目の前、高速道路に面する側の入口に、大きな石づくりの門がそびえている。これが独立門で出来たのは少し古く、大国清に押され放しだったこの国の独立を願って建てられたそうだ。この広い公園の地は、実は長らく西大門監獄の建物が並んでいて、独立運動の志士たちも戦後の民主化運動で捕えられた人たちも、つまりは政治犯の多くがつながれた歴史的な場所なのだ。刑務所が移転したあと政府がアパート業者に売るところだったのを、独立門もあることだしと民間の運動がみのって、公園にして残すことになったと

のこと。

間もなく3時だが、集会は始まりそうにない。入口でパンフを配り、マイクが韓国語の歌を流して、人びとはあちこちでかたまって開始を待つ様子だ。当時の監獄がそのまま数棟、敷地の端の方に残してあるとの話なので、待ち時間を利用するようなつもりで、そちらを見に行った。

志と恨みは今も　なるほど古く赤いレンガ造りの3階建て？が数棟、斜めに組み合わさったような配置で当時のまま残っている。鉄格子ごしに窓からのぞくと、セメントや石の粗末な房や廊下らしきものが見えた。背後の丘には数十段の石段をつけた望楼らしい小建物もあり、こう見張られていてはレンガの塀も高いし、脱獄はできそうにない。女子の房は別棟の地下だったそうで、とりこわしたが記念にと実物大で再建したのが、展示用のガラス張りの中におさまっている。柳寛順もここに捕われ、拷問を受けて若い生命を閉じた、と英文つきハングルの説明板にあった。

処刑場もあるとのことで捜したが、どこか分からなかった。代わりに看守用事務室風の一棟が記念の展示場になっていて、入ってみた。ここで行われた拷問のパノラマは独立記念館のそれと似ていたし、別のかなり広い一室は731部隊関係の展示だった。中国東北部で石井四郎少将指揮の特殊部隊が、給水防疫を表向きに生物兵器や毒ガスなど国際法違反の研究をやり、中国人捕虜や抵抗運動の民間人などを材料に生体実験をした。関係者たちが戦後に書いた自白調書の現物が並び、犠牲となった人体の写真が、斑点や病相そのままに撮されている。対象者たちを縛って一定距離の円陣に並べ、ガスや細菌の効果を測定した、「科学的」な実験計画図もあった。

皆厳粛な顔で言葉もなく、展示棟を出た。元の集会場へ戻ったら1時間ほどの間にもう終わったらしく、人びとが帰りかける中で朴教授が待っていてくれた。二つ目の集会を見そこねたのは残念だが、多分やはり韓国語で分からなかったろうし、政治犯たちの苦闘の跡を直接見たのだからと自らを慰めて、ホテルに戻った。

4.　韓国の青年たちとの交流

YMCAの7人と

みんな若いが社会人　報道写真家の金氏はあちこちに顔が利くらしく、YMCAの韓国青年たちとの交流を進んで提案し、設定してくれた。これが3月1日夜6時の約束だから、この日は朝から病院での会見、大使館前、パゴダ公園、監獄跡にこの集まり、とまるで2-3日分もの充実したスケジュールをこなしたことになる。

ホテルのロビーに集まってくれた青年は男4女3の7人、金氏を入れて8人で、こちらとちょうど同数になった。そこで近くの店の座敷を借りて、焼肉を食べながら懇談しよう、となった。細長い卓の両側に両国の青年たちが対面して座り、金氏が司会と通訳。といっても日本研究会のメンバーとのことで、半数ほどが日本語を解した。

みんな若々しく20代見当だが全員社会人、研

究会長はちょっと年長らしく、高校の倫理の教員と自己紹介した。あとは貿易、保険会社、観光関係、書道の先生などいろいろで、男子の一人が「秘密」と言って勤め先を明かさなかったのには、何か意味があるのだろうか。日本研究会というのはここ3年ほど週1回の集まりで、会長がスケジュール表を見せてくれたが、日本の歴史や政治、慰安婦問題に最新の阪神淡路大地震まで入っていて、充実した勉強に驚いた。こちらは1年生ばかりだから皆10代、幼さは争えないが一生けんめい話して、決して見劣り聞き劣りはしなかった。

若者らしく盛んな食欲で同じ鍋をつつき、軽い話題で次第にうちとけた。韓国では今もワリカンは、冷たい、他人行儀だときらわれる、特に男はオゴるしきたりでデートもラクでない、との話。日本ではワリカン当然となった、こちらもきっと10年後には、などなど。

徴兵制、南北分断と若者たち　一通り食べ進んだ頃にこちらの女子からいきなり、深刻な質問が出た。徴兵制をどう思うか、と。日本での事前の会合のとき私が、第1部の7にあるP嬢から聞いた話をして、向こうで交流のとき直接聞いてみるといいと言ったのを憶えていたのか、元から関心があったのかもしれない。すぐ返ってきた答は、南北分断対立の現在では仕方がない、学び盛りの2年半のマイナスは大きいが。統一が成ったら日本のように志願兵制になれるのでは、と希望をそこに託しているようだった。

兵役を終えていないと外国へ行く資格がない、会社で勤続3年に換算してくれる、などのプラス面もあることを、当人たちの話で初めて知った。また北朝鮮の兵役は8年だそうで、こちらはまだマシ。北では食い物が乏しいから、長い兵役も食える意味でプラスでは、とこれは皆が笑ったところを見ると当て推量の冗談だったらしい。

分断の責任は日本にもあると思うか、最近村山首相が前言を訂正したばかりだが。統一に日本が果たすべき役割は。と鋭い質問が、お返しのように向こうから来た。当方の女子がすぐ受けて、村山さんはおかしい、気の弱い人だと思うと答え、統一に日本の果せる役割をそちらはどう思うのか、と切り返した。日本が責任を果たすとは何か、韓国は日本の悪い所例えば学歴社会や公害等の後追いをしているのでは、など双方のやりとりがあったあと、こちらの別の女子が、過去の責任もだがわれわれ若者は対等平等の国民としてつきあいたいと思う、とはっきり述べた。

逆に韓国に学ぶことは何か。道など親切に教えるし老人に席を譲る美風が残っている、英語の力がはるかに上だ、など口々に答えた。こちらの一人から、日本では大学に入っても何をしたいのか分からない者が多い、韓国では自分の将来をいつどう決めるのか、と質問が出た。金氏の通訳に皆首をかしげていたのは、この国でも同様なのかそれとも、国や社会に尽くすことが当然の道徳となっているための答えにくさだったのか。

女性差別は今も　やがて話の輪が分かれたので、女子ばかりの対面となったあたりの席に、わりこんでみた。日本語を話す一人が突然私に、「今日は何の日か知っていますか」と問いかけてきた。即座に答え、そのために3.1に合わせてきた、と答えたら今度は、「日本が韓国にしたことをどう思うか」ときた。もちろん悪かった、まだ生まれてなかったなどと責任のがれはしない、と答えたら満足したのか、表情まで穏やかになって話がはずみ出した。

彼女たちの勤め先ではやはり男性優先、女性は補助的仕事で給料も低め、良いとは思わない

が壁が厚い、と三人はうなずき合って答えた。例の彼女は、日本語をもっと磨いてガイドや通訳の試験（何十倍だかで難しいそうだ）を受け、やりがいのある仕事をしたいと勉強中、と話した。

続いてまた、「先生の年はいくつですか」とえらく直入に聞いてきた。ノーコメントと答えたら私の左右の女子学生がさわぎだして、私たちも知らない、教えて、と韓日共同戦線となった。笑いながら、私は教師だけれどこの件は教える義務の範囲にない、と言ったらテキもさる者、和光には定年があるからその時にアアやっぱりと言ってあげる、と切り返してきた。

楽しい懇談もやがておひらきとなり、皆でカラオケに行こうと衆議一決して、夜の街をゾロゾロ歩いた。さっきの彼女がそばにきて話しかけたので、本当はソウルだけでなくもっと地方へ、農村の暮らしなども見たいと言ったら、すぐ同意して、ぜひ又きて下さい、それまでに私が資格を得ておいてガイドしてあげます、とさわやかに言った。

カラオケは若い人ばかりで行きなさい、と教員二人と金氏は遠慮した。あとで聞くと韓国語の歌をたくさん聴いて、分からないながら楽しかったと言っていた。日本のも歌えるカラオケだと料金が2倍以上だそうだから、若者のフトコロでは節約したらしい。ワリカンにしたかどうかは、聞きのがした。

漢陽大学生との交歓

今度は街で自由に　翌3月2日は朝から漢陽大学に行って、朴教授の研究室で韓日近現代史の講義を聴いた（後述）。近くの店で昼食後教授と別れて大学に戻り、P嬢の仲介でここの大学生たちと会った。彼女の出た教育学部の学生控室だから、ここを借りて前夜のような、今度は双方学生同士の話し合いをやるのかと思ったら、違った。P嬢が提案して学生たちも賛成したので、固苦しい話は抜きにして若い者同士自由に街を歩こう、希望の所に案内したり学生生活を彩るあれこれを見せて回ったり、つまりは両国学生だけのくだけた行動的交流にしよう、ということになった。

向こうは男1人女3人、こちらも男1人女5人で似た比率だが、全員一緒に行動するもよし、グループに分かれるのも自由、とのことでちょっとは心配だが、同意することにした。韓国の方の彼は日本語ができるらしく、しっかりしていてリードも目配りもしてくれそう（あとで聞くと、兵役をすませた年かさの4年生とのこと）だし、こちらの彼には、日本男子の代表だよといささかハッパをかけて、送り出した。合わせて10人の若者たちは、嬉々として大学から街へ出ていった。

国際化を体験したらしい　その夜のミーティングで話を聞くと、途中で韓国のメンバーの入れ替わりはあったが結局一緒に行動して、南大門あたりをぶらつき、旧王宮の一つである徳寿宮に行き、食事をして夕刻にはホテルに戻ったという。口々に言う感想で一番多かったのはやはり言葉の壁で、韓国語やハングルをもっと勉強したい、英語を話せる子が多くてかなわなかったし、万国語としての大切さを知った、などなど。彼らなりに初めて国外の、日本語以外の言語が主要交信手段である現場に身を置いて、若者レベルの「国際交流」の大切さといったものを、体で感じたらしい。例の韓国側の彼は、がんばって皆をリードしエスコートもしたらしく、頼もしかったと女子学生たちの評判は上々であった。

5. 社会の未来を望んで挺身する人びと

朴教授のこと

志高い国際人　ここまでの記述ですでに分かったと思うが、朴教授はただの大学教員ではない。社会の現状を憂えてよりよい未来を志すさまざまな民間団体と関わり、国際的に活動している。日本でいえば教職員組合にあたる各学校段階の教員組織は今なお非合法で、その副委員長と大学教員代表を4年もつとめた。非合法だから高校以下ならたちまちクビが危ないが、政府もさすがに大学には手をつけ得ないとのこと。日本での原発反対運動などにも関わるらしく、P嬢の紹介でつながりができた来日も、そんな用向きだったそうだ。当然あちこちからにらまれているが、定年まであと1年だから（64歳）いいんだ、とアッサリしている。金ハルモニと同様、残る自分の人生を歴史の証人として、その方向を少しでも変えるために、奔走挺身しているらしい。

そんな忙しい東奔西走の身なのに、見ず知らずだったわれわれのために、足かけ3日の日夜をさいて尽力してくれた。着いた夜さっそくホテルにきて夕食に案内してくれ、その翌日は大使館前以降つきあって、3.1集会のハシゴをリードしてくれた。次の3月2日は自分の研究室で、われわれだけのために韓日近現代史を、自製の資料（44～45頁）を配って熱心に講義してくれた。韓国人の誠実さ、人のために労を惜しまない情の篤さ、などの典型として深く感動したが、それだけではなさそうだ。最初の晩から学生一人一人の名を聞き、各人の興味関心や韓国行に求めるものを一々丁寧にたずねていたし、その後共に行動した折々いつも、こうしてこの国に来て学ぼうとする日本の若者への、温かい信頼と期待にみちていた。

体験とそれに基づく講義　最初の夜に、またその後も折にふれて話されたところでは、8月15日光復のときが中学3年で、従って日本の植民地教育を10年近く受けたことになる。父が牧師で物的富を求めない人だったから、幼時は野草入りのカユが常食で、「背が伸びなかったのはそのせい」と、小柄な体を揺すって笑われた。小学校では日本人教員に教わったが、小2のときは初々しい10代の女性代用教員で、差別なしのやさしい接し方が強く記憶に残っている。何十年も経ってからツテをたどって、彼女が山梨で健在、結婚で姓も変わった70代なのを捜し当て、当時の同級生にも呼びかけて再会を果たしたという。ところが小5の担任男教師がひどい差別者で、受けた数々の侮辱や暴行を、これ又今も忘れないという。

創氏改名は法でなく強制ではなかったが、韓国姓のままだと進学もできないなど数々の不利があり、自分も先祖をたどってシラギとゆかりの新井姓を選んだ。おかげで進学もできたが——と彼の語る近現代史は、自身の痛切な体験に基づいているだけに、単なる本や講義にはない力と真実味にみちていた。資料に見る通り韓日関係史に沿って、日清日露戦争の起因や背景にある当時の国際関係などを、分かりやすく語った。やがて主権を奪われる被害に刻々近づいていた民族の側から聴くと、歴史が新しい意味を持って立ち上がってくる。殊に「併合」前後の日本の無法さには、改めて深く胸を刺され

近代韓日関係略年表

1392. 朝鮮王朝 開創
1592~8 壬辰・丁酉倭乱(文禄・慶長の役)
1854 日米和親條約
1864 高宗即位(大院君 執政)
1866 丙寅教難(洋擾)
1876 丙子(江華島條約)
1868 大政奉還(明治新政府)
1873 征韓論沸騰
1881 辛巳大斥邪運動
1884 甲申政変
1889 防穀令 撤回
1894 東学農民革命軍烽起、朝鮮財体制 ―日清戦争
1895 三口干渉、閔妃殺害
1896 第一次抗日義兵運動 俄館播遷、独立協会活動
1902 日英同盟成立
1904 日露戦争
1905 乙巳條約、第二次抗日義兵、桂-Taft密約
1907 丁未7條約、旧軍隊解散、第3次抗日義兵
1909 伊藤博文暗殺
1910 日韓合邦、朝鮮総督府の武断統治
1919 三一独立運動「文化統治」

1926. 6.10 万歳事件

1931. 満州事変. 満州帝国

1935. 神社参拝強

1937 中日戦争(支那事変). 「皇国臣民の誓詞」制定強要

38 日本語教育令 朝鮮語通用

40 創氏改名強要

1941. 太平洋戦争

43 徴兵令

45 終戦・解放

48 大韓民国. ——人民共和国

50 朝鮮戦争

51 サンフランシスコ講和

60. 4.19革命、(安保闘争)

61. 朴5.16クーデター

65 日韓基本條約

72 維新憲法

73 金大中拉致事件

79 朴正熙射殺

80 光州民主抗争 全斗煥クーデター

87 6月民主大抗争

88 盧泰愚

93 金泳三

る思いがした。

チョゴリが似合う　大使館前で落ちあった昼、教授が目のさめるような濃紺の韓国服だったので、びっくりした。女性のチョゴリは見る機会が多いが男性は当地でも珍しいし、薄いピンクの袴とよく合って上品に似合っていたから。そう言ってほめたらうれしそうで、聞くとこれを含めて3着お持ちとのこと。やはり民族特有の服装は、味があるし似合うようにできてる、と再認識した。

翌3月2日のお講義の日も、同じ姿で現れたので又ちょっと驚いた。3.1は特別の日だし、街なかだからかと思っていたから。大学にも平生から時々この衣装でこられるそうで、別に前日ほめたためではないらしい。

余談だが、翌3月3日の自由時間に昌慶宮に行ったら、映画のロケか何からしく男女合わせて20人ほどがそろってみごとなチマチョゴリで、男性は黒いツバのある高帽子をかぶっているのを見た。休憩中か古い建物の縁に並んで掛けていて、近くの庭には昔のらしい赤い輿(こし)が、みごとな彫刻づくしのが据えてあった。同じ昌慶宮の庭で結婚式の若い一団もみかけたが、こちらは日本でもよく見る白いウェディングドレスで、面白くも何ともなかった。

黙々と支える人びと

カメラマン金氏　彼も、初対面のわれわれをわざわざ空港まで迎えに来、金ハルモニとの会見をセットし、大使館前に案内し、そして夜には若者同士の懇談を全く自発的に設定してくれた。何の義理もないはずの一行が「韓国で学ぶ旅」を意義あるものにするために、黙々と尽力してくれたのだ。

病院での通訳の合間にふと出た話では、彼は光州事件（1981年、民主化運動の盛り上がりが弾圧された痛ましい事件）のとき大学1年だったそうで、だから30歳すぎの今日まで、報道写真家として社会の諸断面を撮りつづけ、その面から民間諸団体と関わっているらしい。金さんたち慰安婦の写真も撮っているが、まだ写真集や本にする自信がないので、と謙虚なのだった。

さらにハルモニの話を訳しながら彼は何気なく、もし自分が教員だったら、たくさんの子どもに歴史の真実を伝え未来を考えさせることができるのに、と言った。これも謙虚なひとりごとだったが、現にその職にある自分の怠慢さを言われたようで、ハッとした。やがて金さんとさよならするときに、今日のことは日本に帰ってみんなに伝えます、と力をこめて話さずにはいられなかった。

史学科の講師夫妻　朴教授と同じ史学科の講師は、奥さんがP嬢の先輩で親しく、朴教授と一緒に来日していた縁もあって、3月2日夕学生たちが複合デートをしている時間に、こちらの教員二人と計五人で会って、街で食事をした。夫妻とも日本語はほとんど話されず、P嬢の通訳に頼った。

教授と同じ近現代史専攻とのことで、漢陽大学史学科の重点はその辺にあるのだろう。国史の教員はあと1人、西洋史東洋史が2人ずつとのこと。朴教授の講義は想像した通り学生に評判がよく、脱線もするが内容豊富で魅力的だそうだ。彼はちょっと違って生マジメな学究タイプだが、同じように誠実で考え深い人柄、と見うけた。

史学科の女子学生は1/3ほど、まじめに勉強して記憶の得点は良いが、歴史観歴史認識といった総合性ではちょっと、との話に、日本の場合も似ています、と同感。来日の印象をとたずねたら、歴史家らしく二つの話をされた。皇

居前広場に行ったとき、平和に群れる日本人たちを見て、ここで爆弾を投げた朝鮮人のことを思って複雑な気持になった（私はそんな事件の存在すら知らなかった。事が天皇と関わるため秘されたのだろう）こと。もう一つは鎌倉で日本食を共にしたとき、日本人はおいしいと食べ、韓国人はまあまあと言い、中国人はうまくないと評した話。味覚にさえ被支配の度が表れる、と近現代史家らしい話。

3.1秘話ほか　独立宣言に連署して覚悟の下獄となった33人のうち、32人までが戦後政府の高官になったり豪邸を持ったり、どちらかというと裏切りめいた生き方をしたようだ、という話も、初めて聞いた。もっと詳しく具体的に知りたい、例外の１人の名も、と言ったが彼は、これ以上は言えない、と口を閉ざした。それこそ歴史認識の問題であり、軽々しく事柄や批判を喋ることは史家の良心、あるいは民族の誇りが許さなかったのだろう。

そこでちょっと意地悪く、韓日史の堀り下げはますます必要だろうが、光復後50年、アメリカとの関わりはこの国の現代史さらに近未来にとってむしろ最重要といえるのでは、と質問した。本書の第１部にあるような、韓国全大学が進みつつあるアメリカ化の現実が、私の頭にあったのは事実だ。彼は温厚にうなずいて、日帝の悪を強調するあまり、アメリカ即善の風潮がないとはいえない、アメリカの「帝国主義」は、関わる小国のためをはかると見せて自分の餌にしかねないから、と鋭い意見を述べた。そして、どこの国の行き方も、結局はそれを選んだ国民の責任です、と重い結論をサラリと言った。

奥さんは教育相談関係の仕事をしていて、小２と小６のお子さんはこういう晩、「ちゃんとルス番する」ようしつけてあるとのこと。夫君はかなりの酒豪なのにほとんど一口も飲まれず、彼の教育力は学生に届いても奥さんには及ばないらしい。そう言ったら笑って妻を見て、「教育可能性がないから」。え、教育学部なのに？と大笑い。焼肉店のあとはビアホールで、「二次会」にあたる言葉は韓国にもあるそうだ。ここでもかなりのピッチで、ラストは生ビール１個を彼と私で半分ずつ分けて飲む親しさだった。

私が、金さんとの会見やＹＭＣＡ懇談で女子学生が言った言葉のうち二つを、紹介した。国対国だけでなく、私たち一人一人を見てほしい、というのと、歴史を大切にしつつわれわれ若者は平等対等の国民としてつきあいたい、と言ったこととを。Ｐ嬢の訳につれて夫妻は深くうなずき、日韓の若者に託す思いが共通のものとして五人に伝わり合った。

6. まとめ — 韓国再訪４つの意味 —

ここで「はじめに」に掲げておいた４つの事柄について、2-5節に書いたことをふまえて、簡単にまとめておこう。第１部では「韓国大学を見る６つのポイント」としてまとめたが、再訪は記録で分かる通り、韓国社会の現実と過去未来、日本との関わりといったものが主要な面となった。その分前のよりまとまりは悪いが、やはり得たことを書きとめておくことが、再々

訪のためそして若者たちへのメッセージとしても、いくらかプラスはありそうだからだ。

1)3.1は重要な史実　3.1当日に合わせて訪韓したことは、きわめて有意義だった。政府との距離や史観は人それぞれでも、韓国人が共通の拠り所としているものの一つが3.1の体験であり事実なのだ、ということが現実に即して分かった。他にも抵抗運動はあったにせよ、もし全国規模のあれがなかったら、韓国民の敗北感はもっと強かったにちがいない。

あれだけの圧政と弾圧の中であれほどの抵抗がやれたことは、韓国史の誇りであり今後への自信とも足がかりともなるだろう。犠牲を強いた側のわれわれが、そんなキレイ事を言っては本当は申し訳ないのだが。

2)慰安婦問題の意味　慰安婦だった人自身の話を聞き、大使館前で鉢巻の老婦人たちの叫ぶさまを直接目にしたことは、この旅のかけがえのない収穫だった。今も儒教道徳の根強いこの国で、たくさんの男と交わった過去を語り、ああして顔を上げて歩くことは、よほどの勇気と、「歴史の証人」となる信念がなくては、生き難いことだろう。

全く彼女たちの責任ではないのに、政府をはじめ皆の目は今も「恥ずかしい」だということを、現地ではっきり知った。これも、そうした犠牲を強いたのはわれわれ日本人なのだから、放っておいていいわけはない。

3)統一への熱い思い　戦後初めての文民政府だから、軍政やクーデターのこれまでと違う民主化へと進んでいるものと、遠くから甘く見ていたがそう簡単ではないらしい。南北が対立接地している限り、軍備は必要、徴兵も仕方ない、2年半は損失だがガマンできる、となるのは多分やむをえないのだろう。

それだけにその裏返しとして、分断のままの50年に老若皆がいらだち、統一への思いがつのるのも又全くの自然だ。日本の責任と今後を、首相が何を言うかでなくわれわれが何とかしなくては、と考えさせられた。「国の行き方はそれを選んだ国民に責任がある」のだから。

4)未来を望む人びと　P嬢をはじめとする何人もの善意と、そして好運にも支えられて、こうしたすぐにはよくならない状況の中でも、黙々と挺身する人びとに会えた。去年11月に会ったのは大学人ばかりで、その世界の人びとの努力に感銘したが、それとは又一味違った貴重さだった。

そしてその人たちに共通だったのは、自らの実践を継ぐ若者たちを信頼し託そうとして、常に語りかけあらゆる機会を生かそうとしていることだ。連れていった学生たちもこの付託を受けとめたと思うし、教員として彼ら以外の日本の若者とも機会を持つ者の責任は重い。

7. 韓国の光と影ふたたび

第1部では記録とまとめを書き終えたオマケとして、初めての韓国行の感想をあれこれ書いた。約3ヵ月後だが、新しい見聞も変化もあったので、ポイントを絞ってそれぞれの項目について短く述べようと思う。

二つの国旗　この国の国花は依然として咲く

季節ではないし、日本のも約1ヵ月先だ。代わりに今回は、二つの国旗に思うことがあった。慰安婦だった人が実に率直に、日の丸を今も許せない、兵隊の鉄砲についていたのを今も思い出す、と身ぶり入りで語ったことが一つ。

太極旗の方はこの前きたときは、複雑な図柄だな描くのは大変そう、と思った程度だったが、3.1運動のとき、もちろんこれを持つことさえ罪だった中で、人びとが独立宣言を服に縫いこむなどして各地に散ると同時に、行進のためにひそかにあの旗を作った事実を知った。市日などに一せいに掲げて、死を恐れない人びとが行進したときの旗の波は、きっと国の花が一どきに咲いたようだったにちがいない。

今も戦時下　P嬢のこの話を伝えたせいか元々の関心か、学生たちは徴兵制についてあちこちで質問して意見を聞いていた。街を歩く迷彩服の若者や、大使館前に並ぶ警官隊の盾、デモ隊が街を埋める様子など、どれも1年生たちには初めての光景だったろう。私でさえあれほどの盾の列は、もしかすると60年安保以来だったかもしれない。

北朝鮮の軍務が8年ということも、初めて知った。3.1の記念式を北でもやっているそうで、なぜ同じ民族が同じ拠り所を確かめ合えないのか。部外者さえそう思うのだから、この国の人たちは一そうにちがいなく、一日も早く戦時体制が解けて自由な志願兵制となることを、共に願わずにはいられない。

道のこと　道がやたら広くて渡れず、地下道は迷路同然で交通渋滞四六時中、という事情は、3ヵ月で好転するはずもない。しかし私の方に、ふしぎなほど大きな変化があった。

11月のときは半日の自由時間に、誰にでも分かる景福宮にたどり着くのさえ大苦労だったのに、今回は1日半あったのを使って、一人で地下鉄に乗って昌徳昌慶宮に往復できたし、地図一つで迷わずに南山公園、南大門市場と回って、ちゃんとホテルに帰れた。

人間そう急に利口になれるわけはないから、初めて一人で地下鉄に乗るときは、歩き初めの幼児のように不安で一杯だった。P嬢や朴教授の先導で乗るときは任せきりで、駅名一つ見ていなかったから、乗るべき線とホームをみつけるまでに、何台かの電車を空しく見送らなくてはならない始末だった。しかしそのうちソウルの地下鉄駅に全部番号がついていることを発見してからは、すべての謎が解けたように全く迷わなくなった。その点東京の地下鉄より、ずっとタチが良い。

道を歩くときも、建物の名や標識等すべてハングルだから文盲同然、という事情は変わらないが、道の広さやたまに英日の字を添えたビルなどを拠り所に、間違いなく歩けることを体得した。地下道に降りるときも、渡るべき方向に片手の指をしっかり向けて、何度体の向きが変わろうと一定に保つようにすると、方角を見失わない術を発見した。だからたった2回目で、ソウルの地下鉄ならもうどこへでも行ける、複雑な乗換えも大抵大丈夫、という自信がついたのだ。

こうして人は物を知っていくのだ、という実感は、幼児期に帰ったように新鮮だった。去年の11月きりだったら私は今も、韓国の都市は一人では歩けないこわい所（アメリカとは別の意味で）と思いこんだままだったろう。体験すること、誰かに頼りきりでなく自分の責任で行動してみることの大切さを、改めて身にしみて知った。これは個人の成長でも、国と国が知り合うプロセスにも、いえるのではないだろうか。

言葉のこと　日本では従軍慰安婦という名称が一般的だが、こちらでは日本軍－である。似

たようなと思いがちだが、金さんが力をこめて「私たちは好んで慰安所に行ったのではない」と言うのを聞いて、ハッと思い当たった。多分気づかずに使って韓国の人を傷つけている言葉が、ほかにもいろいろあるだろう。差別の気持を去ることはもちろん大事だが、習慣化した言葉に気を配るこまやかさも、必要なようだ。

去年11月のときはP嬢のお母さんとの話でうっかりやったミスを書いたが、今回もちょっと違うが似た体験をした。自由時間に一人で昌徳宮に行ったことは前に書いたが、自由に入って見学できるものとばかり思っていたから、着いてみると門も入場券売場も閉まっているのにとまどった。金曜だから休みのはずはないのに。

門前にたたずんでいた老婦人に、話しかけてみた。彼女は目を丸くして「あなた、一人(いちにん)？」とたどたどしい日本語で聞いたあと、門前の時刻表を指して身ぶり入りで、ここのルールを教えてくれた。自由に入るのでなく、日に何度か決まった時刻に韓、日、英語別のガイドによる「ツアー」で回らなくてはいけないきまりだ。自分は12時の韓語ツアーで入るが、あなたは12時半にここへ来ればいい、と。

正午15分前くらいだったから、門前にあった石のベンチに腰をおろした。こんな小さいとき、と手まねで示して彼女は、「日本語習った、ずっと使わない、ダメ」と笑顔の片言で言った。続いて突然、「あなた、いくつ」ときた。YMCAの彼女といい、この国では女性に年を聞くことは失礼ではないらしい。自分を指して「71歳」と言うから、私もつられたように素直に、本当の年を答えた。

彼女が苑内に去ったあとで、考えた。入場のしくみが分からなくて困ったとき、私は意識せずにそのあたりにいた人たちの中で最年長らしい人を選んで、話しかけた。結果として通じたのだから、韓国を旅する術を又一つ発見したともいえるが、過去の日本の悪業に今もよりかかった後味の悪さは残った。

朴教授は学生たちに、くり返して言っていた。韓国語ハングルを学びなさい、この次くるまでに、と。いつまでも過去の残影に頼るのではなく、新しい両国の関係は言葉をそれこそ平等対等に学びあうことから、始まるはずだ。ちょっとでも勉強してからでないと、又こっちにきて朴先生に会えないね、と学生たちと話したが、私の年齢ならこのときの老婦人とのように、似た世代のはかない親しみの絆に頼ることを、教授は許してくれるだろうか。

ミサに出てみた　アメリカでと違って早朝散歩が毎朝できることは、韓国の安全さの一証拠であり、私もごきげんだった。ホテルの近くにカトリックの諸施設群があるのをみつけて、試しに入ってみた。修道者たちの住み家らしい建物や、学校と運動場がいくつか。中心はもちろん大きな聖堂（明洞聖堂）で、前を通ったら人びとが小さな入口をくぐって入るのを見かけて、私も好奇心半分入ってみた。もちろん無信仰の縁なき衆生だが、神は拒まれまいと勝手な見こみをつけて。

高い天井、窓々に美しいステンドグラス、ずらり並ぶ座席には聖歌集。正面の祭壇では白衣の修道者たちが何やらやっていて、年輩の神父が台に立ってこれからミサが始まるらしい。フロアに50〜60人くらいはいたろうか、暖房はないから皆コートのままで、女性の多くは白いベールを着けている。やがて始まったが、説教も問答や歌もすべて韓国語だから分かるはずもなく、私は周りを見て適当な厚みの頁を開いて、読むふり歌うふりをした。説教に時折まじる「イエス・キリスト」と「マリア」の固有名詞だけが、理解できる単語だった。

40分ほどの間、早春早朝の寒さに耐えてミサにつきあい続けたのは、単なる好奇心や時間つぶしではない。再訪に備えて一人で多少の予習をした中で、3.1の頃そしてその後も、教会が抵抗運動の人びとの心と体の拠り所だったことを、知ったからである。朴教授も話していたが、日本が支配した間人びとは3人以上集まることを禁止され、唯一例外の場所が教会だったのだ。当時の日本は（今もそうだが）欧米諸国の評判を落とすことを恐れていて、教会へ立ち入ったり弾圧することは多くの場合控えていた。それを利用して抵抗者たちは、ここで集まり追われれば逃げこむこともした。

しかしいつもそううまい隠れ家でありえたわけではなく、教会が反体制の巣と見られて焼き打ちされることもあった。堤岩里の事件が典型的で、集まった信者もろとも焼き尽くされ、逃げようとした者は皆殺された。夫を殺されかろうじて生き残った老婦人のインタビュー記事が、私の読んだ本にのっていたのだ。そう知ってみると、周りの敬虔な人びとが同志の集まりに見え、聖堂全体が燃えあがる幻影が見えた。

韓国のキリスト教が、仏教その他を引き離して多数の信者を持つことを、前からふしぎに思っていた。すぐ隣の日本では明治以来信者が一向に増えず、1ケタに止まっているのとあまりに違うからだ。その理由が、やっと分かった。受難期のなごりなのだ、と。それだけではない。今も南北の分断が続くなか、民主化を求める政治犯の悲劇は続いているのだから、もしかすると教会は今も、欧米をはばかる政府への、反体制拠点の一つかもしれない。

ミサを終えて出てきたら、教区入口の道に座りこんで、ザルを前に頭を下げている物乞いの老女を見た。こうした人を見たのは久しぶりで、敗戦しばらく以来かもしれない。韓国の影の部分を、ふと見た思いだ。いま韓国は、日本を追いこせ式の経済発展がすごいらしい。教会は独立や民主化を求める闘士たちにとって光となったが、こうした人びとを救うことはできないのだろうか、と考えた。

二、プロゼミの教員、学生は考える

1. 伊藤プロゼミと韓国旅行

伊藤武彦

和光大学は、これまでの高校教育から大学教育への橋渡しとして1年生のためにゼミ形式の授業を開講している。これをプロゼミとよんでおり、今年度の人間関係学科では必修科目ではないものの、ほとんどすべての1年生が受講登録をしている。今年度の人間関係学科のプロゼミのテーマを参考までに列挙すると、「平和を学ぶ」、「メディア・リテラシー」、「児童文学における子ども像」、「ラスト・ラブ」、「古代技術復元実験」、「『共に生きる』とは？」、「小説で読む思春期・青年期」となっている。1995年4月より人文学部人間関係学科は発展的

に解消して、新しく人間関係学部として出発し、人間関係学科と人間発達学科の2学科の構成となるのだが、このプロゼミ制度は両学科のカリキュラムに必修科目として位置づけられている。

伊藤の担当している「平和を学ぶ」というプロゼミでは、現代および歴史的な平和問題について、いくつかのテーマをとりあげ、研究報告と討論という形式で授業を進めてきた。前期は文学科の祖父江教授を特別講師として中勘助の文学と戦争の問題について語ってもらった。森田俊男『実践平和主義読本』（平和文化）をレポーター形式で読み進めるとともに毎回のように平和に関するビデオをみて討論した。夏休みは、8月6日をはさんで広島へプロゼミ平和学習旅行に行き、反核行事に参加し、原爆遺跡めぐりをおこなった。ゼミ員Sさんの自宅に全員泊めていただき、バーベキュー・パーティなどごちそうしていただいたのも、なつかしい思い出である。

後期は隣国との関係で平和を考えるために歴教協（編）『知っておきたい韓国・朝鮮』（青木書店）をテキストにして韓国の植民地支配の歴史などを学んだ。それをふまえて2月28日から3月4日までの5日間韓国へのプロゼミ員有志の旅行を行ったのである。また、後期はプロゼミ員がテーマを選んでレポートを書くという課題が与えられており、現在（3月5日）、12名のゼミ員が「ユダヤ人問題」、「日本のODA」、「従軍慰安婦問題」、「ナチスとユダヤ人問題」、「イギリスの原子力発電所と反対運動」、「平和に求めるもの」、「アメリカ・インディアンの歴史と今日」、「日本軍の残虐行為と教育の役割」、「人間の心と平和」、「沖縄戦」、「沖縄と非暴力的抵抗」、「大逆事件について」、「うたごえ運動と平和」などのテーマについて一所懸命レポートを書いていると思う。

この12名のゼミ員のなかに、高校時代に「韓国平和の旅」のメンバーとして韓国へ行き、平和学習と日韓の学生相互の交流を行った経験を持つ者が二名いる。一人は広島出身のSさんで、もう一人は高知出身の女子学生Wさんである。二人とも高校時代、地元で「高校生平和ゼミナール」の活動を行っていた。朝鮮人・韓国人の強制連行・強制労働がどのように行われていたかを調査・学習し、それを発表する、という活動を行い、また、在日の高校生との交流も行っていた。この活動は、ドキュメンタリー映画『渡り川』として広く昨年より紹介されている。Wさんがクローズアップされているこの映画は、他のほとんどのプロゼミ員も見ているはずである。また、活字の記録として、幡多高校生平和ゼミナール（1994）『渡り川』（平和文化）も発行された。なお、この本はソウルの安重根記念館でも展示されていた。

沖縄に旅行したいという意見もあったが、このような背景があって、韓国へ旅行することに意見がまとまった。日本とは異なる文化、社会を自分の目で見て、これまでの両国の歴史を振り返り、韓国の青年と交流することにより、この隣国との関係を個人レベルでより良く発展させるにはどうしたら良いか、今われわれは何をするべきかを考えることが、この旅の目的であった。また、高校時代に旅行した二人にとっては、前回自由時間が少なかったこともあり、自分で計画した韓国の旅をしたいとの希望もあった。

日程は、12月に行くという案がつぶれ、結局、1919年に日本の植民地支配に反対して民衆が立ち上がった3.1独立運動の記念日（祝日）をはさんだものとなった。このおかげで、日本軍慰安婦（従軍慰安婦ということばのニュアンスがよくないので運動の中ではこの呼称を使ってい

るようだ）の国際会議参加者と太平洋戦争犠牲者が日本政府に謝罪と国家補償を求めての日本大使館前抗議行動、パゴダ公園での3.1独立運動犠牲者追悼集会、独立公園での宗教者平和集会などを見ることができ、繁華街の通りでは機動隊と学生のデモ隊にも遭遇した。また、この日の午前中に元日本軍慰安婦の金学順さんに入院先の病院をお見舞いしてお話をうかがうことができた点でも意義深い日となった。

韓国の大学生との交流をすることが旅行計画段階から重視されていた。昨年、伊藤は入門研の大学訪問旅行に参加し、釜山の大学生と交流できる可能性の感触をえて帰ってきた。しかし、結局、釜山行きは今回断念することにし、ソウル市内にある漢陽大学の学生達と交流するよう計画を立て直した。また、現地についてからＹＭＣＡの日本研究会のメンバーと交流することになった。２日目の夜に一緒に夕飯を食べながら話をすることができ、そのあとカラオケに連れていってもらった。漢陽大学の学生とは３日目の午後、一緒にソウル市内を歩いて回った。

今回のソウル行きでは、漢陽大学の朴賢緒教授と朴媛淑さんをはじめ多くの方々に大変お世話になった。この場をお借りして、カムサハムニダ。

2. 参加学生の感想文

「伊藤プロゼミ 韓国の旅を終えて」

S

明日、私達は韓国を離れなくてはなりません。あっという間の４日間でした。それにしても、初日と２日目は本当に疲れました。でも、この４日間で本当に良い体験をしたと思います。４日間すべての出来事・感想をこのレポートにまとめることはむづかしいので、自分が印象深かった事についてを書こうと思います。

私が、「本当に良かったな！」と思った日は２日目です。もちろん３月１日・韓国にとっても非常に深い意味を持つこの日や、その他の自由行動の日も私にとって良き思い出なのですが、特に３日目の朴賢緒（パクヒョンソ）教授の歴史（近代史）の授業、そして大学生達との交流は、昨日の事だけあって印象が深いです。韓国に来て（旅行に来て）、ただ単に観光するだけでなく、現地の人と知り合いになれ話をすることができるという事は、本当に素晴らしい事だとつくづく実感しました。

３日目の日程は、午前中、漢陽（ハニヤン）大学で朴先生のミニチュア授業でした。私は高２～高３にかけて日本史を選択しており、暗記の好きな私は、比較的他の科目より熱心に学習していました。そのせいか、朴先生の50分授業は理解しやすく、私の知らない話もいくつかして下さり、眠い目をこすりながらも興味深く耳をかたむけていました。その中でも日本史年表などを暗記し満足していた私にとって、1894年の東学農民革命の話は勉強になりました。どうしてこの様な事件が起きたのか、そしてそれがどう発展していったのかを聞いた時は、「ほほぉ～う」と

思わず感心してしまい、自分が少し物知りになった気がしてうれしかったです。

この日の午後は、漢陽大学の学生の人達と会い、学校内を見てまわったり徳寿宮（トクスグン）（大漢門）へ見学に行ったり、夕食を食べたりしました。私が最初に話をしたのは、ペーキョンア（Bae Kyung-ah）さんという、私と同じ19歳の人でした。色白で少し小柄なかわいらしい人で、笑顔の素敵な感じのいい人でした。残念ながら、友人と約束があるという事で彼女とは学内で別れなくてはならなかったのですが、互いの住所を交換し、手紙を書くと約束して別れました。ほんの20～30分しかいっしょにいれなくて、簡単な会話しかかわす事ができなかったので、手紙を通じてもっともっとお互い個人の事、そして学校生活、私生活について、もっとうまくいけば国（文化）についてなど分かり合いたいと思います。同じ19歳ということで、とても親しみがわき、彼女の事を気に入りました。日本に帰り、旅の印象がうすれないうちに手紙を出そうと思います。初めは英語で書くと思いますが、いずれはハングル語で書けるようになりたいと思っています。そして昨日は話すことのできなかったお互いの国の歴史について、そしてこれからの両国の関係について語り合える仲になればうれしいのですが…。その前に、英語の再学習、ハングル語の学習をしなくてはいけませんねぇ。！今書いた事がウソにならない様努力したいです。

あと、ひとつだけ印象深かった出来事を書くとすれば、やはり金学順（キムハクスン）さんに再び会えた事です。以前は夏にお会いしたのですが、その時は真白い薄手のチョゴリを着ていらしたのに、今回はうすいグリーンの病院の寝巻を着ておられました。呼吸器官が悪いらしく、手には、よくぜんそくの人が持っている様な吸入器を持っていらっしゃいました。学順さんの体調が悪くなったのは、座り込みのデモで長時間寒い中に座ったり、叫び続けたせいだと、本人の口から聞いた時とても心が痛みました。また、日本政府は、私たちハルモニたち全員が死ぬのを待っているのだ、と言われたのもとてもつらかったし、同時に学順さん達にそう思わせた日本の政府をとてもはずかしく感じました。

学順さんは話のはじめに、この様な事を言っておられました。「旧日本軍慰安婦の問題は、国が責任をとることです。政府は軍隊・軍人個人個人の責任と言うがそうではない。戦争を起こしたからこのような事が起こったのです。つまり戦争を起こした事が責任なわけです。」たしかに戦争さえなければ、このような問題など起こりえないはずです。では戦争を起こした人は誰なのか？ということになるわけですが、……私は、天皇（昭和天皇）だと思います。学順さんもしきりに「日本の王（天皇）の名で謝罪してほしい、金なんていらないから……」といってました。伊藤先生の、昭和天皇の死についてどう思われましたか？という質問に対して「今では、昭和天皇の墓をくってやりたい」という韓国では最高の悪口を聞いた時、学順さんの心の中では昭和天皇は、悪い意味で生きつづけているのだと思いました。

日本のマスコミは必要以上に皇族の方達をほめちぎるように思えるけど……他の国の人達は皆どう思うのだろう？もしかすると、不思議（不気味）にうつるかもしれません。私も決して皇族の人達をきらいなわけではありません。ＴＶを見てて、ほほえましいなぁと思う時もいく度かあるし、マスコミのおかげで皇族の人達がとても身近に感じたりもします。日本のマスコミの方々！皇族の方々をほめるだけでなく、きちんとしなくてはならない事をもっと深く追求するべきではないでしょうか。よくワイド

ショーニュース放送時間でNo.1に「佳子さまご誕生」などあるけど、これを半分に減らしせめて残りの半分を今、日本が本当にしなくてはならないことをワイドショーを見ている奥さんたちに知ってもらえればいいのになぁと思います。もし、学順さんが日本のワイドショーを見たらきっと驚かれるでしょうねぇ。いきなりだけど、瑞香！ 立派なジャーナリストになってくれ!!!

今日、文ちゃんと他2人が金学順さんのお見舞いに行ったらしいけど、どうだったのだろう？レポートに書いてくれてるとうれしいです。

いきなりまとめに入りますが、本当にこの旅行に参加して良かったと思います。前回とは別の意味でとても勉強になりました。先生なしで行動する事が何度かあったけど、その時、「あ～私、大学生なんだなぁ」と実感してしまいました。決められたスケジュールでなく、自分で考えたスケジュールで行動する楽しさを味わうことができたのもこの旅の喜びのひとつです。アルバイトをがんばったかいがありました。！

この旅でお世話になった方々全員に、ありがとうを言います。

ソウルに来て

W

私にとってソウルという街は2度目であるが、前回と今回ではかなり印象が違った。

1日目は、金ソゴンさんと朴賢緒先生と知り合いになった。オンドル部屋で食事をしたのだが、オンドルはホットカーペットみたいだったけど、床がビニールであまりよくなかった。温度が高すぎるので、居心地が悪かった。

2日目は、金学順さんと再会した。彼女とは3回目で、1度目にはその体験にショックを受け、2回目は私の方が精神的にまいっていた頃で彼女の話にとてもはげまされた。そのせいか、私の中で彼女の存在は大きく、再会はとてもうれしかった。彼女の消え入りそうな感じが2回目に会った時よりも強く感じられ、私は何故か苦しくなった。彼女の体はいつまでもつのだろうか、そんな不安が心に残った。病院という場所だったせいもあるかもしれない。

学順さんの話はつらい話なのにその性格は明るくて、私はいつもうらやましくなってしまう。彼女には被害者意識というよりも、正当なことをしているという自覚がある。私には、それが自分にないものだからこそうらやましく思えるのだろう。私は、被害者意識をもちつつ、それを否定したり忘れたり、それの正当性を悩んだり、彼女のようにキ然と出来ないなと思った。勿論、私と彼女の被害は比べものにはならない程の差があり、（私は主に被害を受ける可能性があるという程度）だからこそ、あんなに強くなれないのかもしれない。

彼女と別れた後、日本大使館パゴダ公園と独立門、731部隊展、処刑場を見た。その後Y，M，C，Aの人と食事をしてカラオケに行った。どこに行っても、誰と会っても、韓国の被害者意識は目についた。Y，M，C，Aの人も3月1日について聞いてきた。私は、それを知っているし考えてるけど、どういう風に話せばいいかわからないし、言葉がみつからなかった。彼女達こそ、3月1日についてどう思ってるか、聞きたかった。

それと、友人の金京珍（キムキョンジン）に再会した。なつかしかったし大人びた彼女におどろいた。1時間しか一緒にいられず、話も出来ず連絡をとろうにも通訳がいないので、少し心残りである。帰ったら色々な事を手紙に書くつもりだ。

3日目は朴先生の話を聞き、漢陽大学生と交

流した。朴先生の講義は歴史が主で気にならなかったが、学生には3月1日のことを聞かれた。やはり、彼らにも被害者意識があるのだろうか、それは教育で植えられたのだろうか、どうして私達に聞くのだろうか…。聞いてみたい事はいくつもあったけど、言葉の違いでどうにもならなかった。

その日の晩は、3人で色んな事を話した。きっかけは、NHKでアウシュビッツについて特集を組んでいて、それを見たからだろう。共産党や政治の話から、同和地区の話や恋愛の話をした。私は同和地区に対して、かなり多くの意見をもっているし、悩んでいたり嫌になったり、被害者意識がある。それを話し始めると、感情的になりやすく自己嫌悪とか怒りとか色々でてくるのでつらいが、話が止まらずつい話してしまう。今回は、2人共部落に対しての私の好まない意見を言わなかったので、わりあい普通にしていられた。ことにこの話に関しては、平常でいられないため嫌いでもあり、話しあいたい話でもある。「自分は被害を受けるかもしれない」、私と同じ立場の人間が被害を受けているから、私には、被害者意識があるといえば少なくともある。だから、韓国人の被害者意識に近い物は感じられる気がしていて、この被害者意識について、韓国人と話がしたかった。

4日目はフリーということで、まず南大門市場に行った。カバンとアクセサリーが欲しくて、そこを中心に私は見た。特に気がついたのは、日本人だとすぐにばれること。韓国語の単語がいくつかわかるので、日本人だと話せばすぐにわかる。何故わかるのだろうか。日本人相手だとどうやらぼるらしいが、うんと言わなければ勝手に下げたり、急によそよそしくなっておもしろかった。彼らが簡単な日本語で話しかけているのを見ていると、観光客をひきよせるためとはいえ、嫌な気分になった。金を得るためとはいえ、日本語を覚え、必死になって物を売りつける姿、日本人観光客が金をひけらかして、韓国人に対し優位に立つという侵略じみた事になっているという意見を耳にした事を思い出し、(彼らがそうさせ日本人がそれに乗ったとはいえなくもないが)、彼らは過去についてどう考え、思っているのかが大きな疑問になった。

その後、金学順さんに会いにいった。今度は、難しい話は抜きで孫のような気分で話ができた。

今回は、前に来た時と違い(共通点も多いが)特に韓国人の意識について興味をもった。言葉の壁は確かに厚くどうにもできず、推測しかできなかった。私が今、重要だと思うのは、彼らがどう私たちに接してきたかだ。何度も3月1日について聞かれた事や、話の中で彼らが見せた表情・態度だけは忘れずに、色々と考えていくたしにしようと思う。

韓国旅行

M

旅の良し悪しは、本当に、人との出会いによって決まると思った。その点では、この旅行は大成功である。普通のツアーでは会えない人に会い、知りえない事を知り、…。

とにかく今は、私にそういった機会を与えてくれた先生、友達、そして出会ってくれた人達に感謝するばかりである。

3月1日　PM6：00～

YMCA日本研究会との交流

この夜は、私にとって、大きな"黒丸"である。(黒丸とは、人生のターニングポイントのことであり、生きていくことは、その点を線でつないでいくことである。)将来を考える上で、この点の出現はまさに絶妙のタイミングであった。

ところが、ＹＭＣＡの若者らと交流のはずが、私はソゴンさんとの話の方を良く覚えている。というのも、私が、徴兵制だの慰安婦だのと、難かしい話題をだしたため、言語の問題もあり、彼らとの間にギャップが生じてしまったのだろう。自然、日本語も達者で、日韓の情勢にくわしいソゴンさんが、私の標的になっていった。

主な話題は南北統一についてであった。彼は、「南北統一の日はそう遠くない。必ず近いうちにある。」と言った。私は、なぜそう言いきれるのか不思議だったので、「どうしてそう断言できるのか」ときくと、彼は、「宿命だからです」と答えた。私は答えになっていない気がして、首をかしげた。すると彼は、「同じ血の流れる民族が、同じ一つの国に住むのは当たり前でしょう」と言った。私はそれでもしっくりこない感じがしていた。そこで質問を変えてみた。「では、あなた方は南北統一にむけて、何か具体的に行動しているのか」ときくと、彼は、返答につまり、隣りと相談したようだが、苦笑いをして「ワカラナイ」と答えた。私はたたみかけるように、「どうして行動もしないのに、統一に自信があるのか」と問うと、「行動もしてますけど、望むことが大事なのです。そうすると必ず叶うのです」と彼は言った。それから彼は、けげんな顔の私に対して、「同じ血」や「宿命」という言葉を言い続けた。そこでやっと私は、この問題は理屈ではないのだ、生まれつきの本能というものに基づいているのだと思った。そして、実際に朝鮮民族の血が流れている人でないとわからない感情かもしれない。昔から、アイヌ民族など、異なった民族を迫害し、かたくなに自分の民族を守ってきた私たちには、少しわかりづらいものがあった。

ともあれ、ソゴンさんは、2010年には必ず統一されるだろうと言い、私もそれを願っている。ただ、私は、「南北両国の主義の違いなんて二の次だ。まずは統一してしまうことが先決だ」という彼の意見には不安を感じた。もし統一したなら、国内ばかりか、世界中が騒然となるだろう。それもまた宿命なのだが…。

私たち日本人にとって彼らや、また他の人との出会いは宿命であつた。まっとうするための課題もたくさんもらった。まず私は、歴史を学び直すこと、そして、世界の移りゆくさまを頭で考え、文字にすること、さらに、情勢を先んじてよめることができるために本を、とにかく読みたい。

私は今、旅の終わった安心感よりも、自分に課したものの多さに、少し臆病になっているのだ。

韓国旅行体験記

H

初めて韓国へ行き、風習、文化の違い、知らなかった、知りたかった韓国を満キツできたと思う。

今回、特に3.1独立記念日に合わせて来たこともあって、韓国国内の雰囲気をハダで感じられ、大変意義深い旅行となった。石原先生が言われていた、上の世代の多くの人々は、片言でも日本語が話せることを考えると、日本がやってきたことは、ザンギャクな行為、強制的な皇国教育により、言語をうばい、それにより、韓国独自の文化を否定し、こわすことにもなったであろう。今の韓国にもその影響は残っているのでは、と言う印象を受けた。韓国と言う国との付き合いは、はるか昔からあること、言葉の形態も、そう変わらないこともあるだろう。そして、私がうれしく思ったのは、どこにでも国民の闘いがあると言うことだ。その相手は、日本政府であるけれども。日本が、戦争責任、天

皇について、姿勢を変えていくことで、平和が守られ、生きていくことにもなる。それを願っている人が、韓国にいることがわかっただけでも心強く感じた。しかし、YMCA、漢陽大学の人たちは、3月1日と言う日はどんな日かと言うことや、YMCAの人とは社会的な論議をすることができたが、あまり関心がなさそうであった。それは、多くの日本人にも当てはまることで、政治、社会には無関心（私は、反対に社会の矛盾から、1人1人心の中では、何かやるせない、いかる、いやになる気持ちを持っていると思う）にさせられていることと、似ている。自分自身も、社会、政治について、いつ何時も考えているわけではないけれど、いつも人が何かをする時、その関わりを断ち切ることは出来ないと考える。無関心だと言う人でも、今回、一緒にみんなと行動する中で、発言される内容などから、政治、社会への関心があるのだなと思った。

韓国へきて、良かったと思ったのは、キム・ハクスンさん、パク先生、ソゴンさんなど、多くの韓国の方々に、出会えたことである。これらの人々と交流ができたことで、日本への思い、風習や、マナーなどについて、はだで感じることが出来て、今回の旅は、有意義に感じられてよかった。そして、それらの人びとは、戦前にされたことを知っているのに、、とても親切に接してくれたこと、懸命に理解してくれようとしているからこそ、昔起ったこともすべてふくめて、考えて、私たちと接してくれているのだなと思った。そして、それらの人々は、非常に勉強家であると言うことである。私が思っている以上に、日本語が通じることや、漢陽大学の学生の英語力には、大変おどろいた。中でも、日本語も、英語もできる、と言う男性がいたが、カナダ留学で、英語を勉強し、日本語は、塾（学院）へ行って3ヶ月勉強しただけと言っていたが、上手な日本語で話してくれた。ここで思ったのは、日本と韓国の教育の差、私たちは、英語を、もうすでに、6年はやっているのにもかかわらず、英語の能力が、ここの学生よりもはるかに下であると言うことである。お互いの教育システムに、違いがあるのだろうと思った。つまり、日本の教育は、身に付かない、問題のあるものなのだと言うことである。そして、韓国へきて、ハングルではなく、英語がこんなにも重要だと思い知らされることは、予想外であった。今は、英語ぐらいなんとか、話せるくらいになっておきたいと思っている。

この韓国旅行で、様々なことを、韓国のすべてを知ったわけではなかったけれど、韓国と言う国を知ることができたことはとても私の人生において、素晴しく思った。

韓国旅行について

Y

今回の韓国旅行で、1番よかったと思うのは、若者どうしの交流があったことだ。YMCAの人たち、そしてハニャン大学の学生達との交流。YMCAの人たちは、少し年齢ははなれていたけど、私たちの質問には真剣に答えてくれた。特に印象に残っているのは徴兵制についての話のところで、若者にとっての大切な時期の2年間を奪われてつらい、その2年間を思い出したくないみたいなことを言っていたことだ。ハニャン大学の学生達との交流は、お互い年齢も近いこともあってかたくるしい話というか、そういうことなしに話をした。言葉の問題があって、話がかみあわなかったことが多かった。しかし、お互いに相手の気持ちを知ろうと懸命に話をし、その質問に答えていたと思う。私は、

それでも良かったと思っている。言葉が通じるにこしたことはないが、こういうことがつみかさなっていくことが大切だと思った。あと、お互いの母国語でない英語で話をしたのが妙だった。ハニャン大学の学生達との交流の中で軍隊に行っている人と話をしたのが印象に残っている。彼と話をしていると、いきなり、敬礼をはじめた。彼の前を見ると彼の軍隊の後輩が、直立不動で敬礼している。日本では考えられないことなので、ハニャン大学では、このことが1番印象に残っている。パク教授の話について、私は今まで歴史をあまり勉強していないので、彼の話はたいへん勉強になった。

次に、キム・ハクスンさんの話で1番印象に残っている事は、昭和天皇についての話で、今でも、彼の墓をほりかえしてやりたいと言っていた事だ。元慰安婦であるという人から直接話を聞けたことにたいへん感激している。そして、彼女たちの裁判がうまくいくことを願いたい。

今回の旅で複雑な気持ちになったことは、たいていの場所で日本語が通じるということだ。買い物に行ってもたいていのお店で日本語で話が通じる。お店の人は、日本語が話せなくても、かたことの日本語で話しかけてくる。あれだけ反日感情が強いと聞いていたのに、なんて親しみやすい人が多いんだろうと驚いている。誤解しているかもしれないが、韓国の人たちは、日本という国に対しては悪い印象を持っているが、日本人個人に対しては、そんなに悪い印象は持ってないように感じた。今回の旅で、最も気楽な気持ちですごせた時間は、夜の町をぶらぶら歩いた時間だ。人がたくさんいる明洞の町を歩き、そして地下鉄の階段を下り、地下商店街を見てまわり、ほとんど人どうりのない地下道を1人ぶらぶら歩いた時間だ。何も考えずに、ただぶらぶらしていた。それでも何か楽しかった。でも、ホテルに帰ってガイドブックを見てみると、夜の地下道は危険と書いてあった。

3日の日の自由行動は、仁寺洞に行ったのだが、これもまたたいへんおもしろかった。何も知らない所へ、ガイドブック片手に地下鉄を乗りついで行ったのが楽しかった。はっきり言うと、最初、今回の韓国旅行はたいへんゆううつだった。初めての海外ということもあったし、男が私だけということも大きな理由だった。この旅行も終りに近づき、今はもうそういう気持ちはない。人との交流も思ったよりうまくいったと思うし、1人でぶらぶらすることもできた。そして、1人でいろいろと考えることもできたからだ。

今回の旅が終ると、見聞きしたことを、日本に帰って、家族や友人に、いろいろ話そうと思う。自慢話というのではなく、韓国の人々が、日韓の歴史等について、どういうことを考え、思っているのか、そして、これからの日本と韓国との関係について話をしてみたいと思う。こういうことも大切だと思う。

今回の旅では、伊藤先生、石原先生、そしてパク教授、パク・ウォンスク先生、カメラマンのキムさん、YMCAの人たち、ハニャン大学の学生のみなさんには、たいへんお世話になり、とても感謝している。これからの日韓関係が、ますます友好になることを願う。

韓国旅行を終えて

T

私は正直言って、そんなにこの旅行が楽しみではなかった。とりあえず初めての海外で初めて飛行機に乗れるし、というぐらいの気持ちだったかも知れない。ただ、少し前からずっと世界史を勉強したり、世の中にはいろんな問題

があるということは、ただ頭の中に蓄積されていくだけの頭でっかちになっていると感じていたので、そういった面では多少ワクワクしていた。私の気持ちの上で大きく変わったことの一つは、自分が“異”である世界があったということのショック。かなり日本と近いものがあるとは言え、私にとっては驚きだった。この韓国という国一つだけのことではあるけど、本当にそういう国は存在していて、私がただ暗記したりしていただけの事実を礎にして生きている人たちがいた。これは現実のことだったんだ、ということが実感できたのは私にとってすごいことだった。よく韓国人は、恨んでるみたいで恐いから気をつけなよ、と言われたりした時に、私は“日本がどんなことをしてきたのか”ということを学んできたはずなのに特に反感は持たなかった。歴史が生きているということを私は感じていなかったのだろう。朴先生の中にずっとこびりついていくだろう“この朝鮮人の奴等め”ということばや、金ハクスンさんが奪われた希望、目の前で、優しい笑顔を見せてくれる人たちから聞いたことはまっすぐに入ってきた。3月1日、パゴダ公園や日本大使館の前でも私は確かにショックを受けた。けれど、一番ショックだったのは、ホテルに帰る途中に出遭った兵隊の行列と、延々と続くデモ隊だった。そこには今の日本の若者たちの無関心、無気力などなくて、物凄いPowerがあった。何度も“万歳、万歳”と叫び、叫んでいる言葉の間に“日本”という言葉が聞こえて、この人達がこんなにも憎んでいる相手が私の国だと思うと、私はとてもその狭い路地を通っていけなかった。それはホテルの部屋に戻ってもずっと下から聞こえ続けていた。いつまでもいつまでも続いていた。けれど日本人はそんなことがあることを知らない。報道陣はいなかった。大使館前での報道も、“あぁまたか”とうんざりさせただけのような気がする。私の国はもう受け皿を用意していない。今の韓国のイメージは“なんか恐い”、“キムチ”“アカスリ”かも知れない、だけど私の脳裏にあのデモ隊の光景は一生焼きついて離れないだろうと思う。私たちはマスコミや教育の中で、知らないものまで知ったような気になっている。どんなことも自分の目で見て聞いて、触れていかなくてはならないと実感した。差別や区別、歴史や人種の難しさ。それは“どちらか”に偏ったものであってはならないし、私は考える力をつける位に学ばなければならない。YMCAやハニャン大学の人たちと話をした時、私たちとほとんど変らなくおしゃれをしたりカラオケが好きだったりする彼等だけど、必ず“3.1”のことについてたずねられたし、徴兵制というものは彼等の日常だった。また、統一は民族の宿命であると言った。日本は統一されて、半島が強くなると困るから嫌がっているだろうと言われた。嫌がっているとかそうでないとかの前に私たちは無関心なのだ。私にとっても視点を変えさせられるような質問や答えがあった。韓国政府についてとか、韓国の若者も知らないことが多いとか。あとつくづく言葉のカベは厚いなぁということ。心底英語だけでも話せるようになろうと思った。街のイメージは何だか人はガンガンぶつかってくるし冷たくて雑多な感じがした。ファーストフードに並ぶ人たちや、夜カラオケを歌う人たち、4,5時間しか睡眠時間がなかったと言ったハニャン大学の学生の受験戦争。金賢姫の手記で読んだ北朝鮮の人たちの生活に比べて、韓国は本当に豊かで潤っているようだけど、日本の後を追っているように見える。カメラマンの金さんは、社会主義でも資本主義でもなく全く新しい体制を持つ国が生れるかも知れないと言ってい

た。これからの彼等の未来には、重い課題が待っている。そしてそのことは私たちにとっても本当は同じはずなのだ。買い物に行けば“ニッポンジン？”とすぐに聞かれた。心の底に歴史認識があるのと同時に、現代の日本人はいい金ヅルでもあるのだ。初めて日本人という民族である自分を感じた旅行だった。そしてそのことはあまり気持ちの良いものではなかった。歴史を肌で感じたこと、1つの異文化に触れたことで、私は“世界って本当にあったんだ、歴史って本当にあったんだ”と初めて知ったと言っていいし、周りが開けたような気持ちがしている。また韓国に来るかどうかは分からないけど、これからは私は沢山のものを見にいろんな国に出かけていくだろうと思う。そして沢山のことを知って、考えていきたい。

「入門研」1994年度研究報告 I

韓国の大学はいま
── 日本追いこせ大作戦
を現地に見る ──

研究代表者　石原静子

発行日　1995年3月31日

発　行　和光大学「大学入門期教育の実践的研究」（授業研）グループ
〒195　東京都町田市金井町2160
電話　044-988-1431（代）

印　刷　株式会社 サン・メールサービス